

本能寺門前版の版式

——毛詩抄をめぐる——

土井洋一

一 はじめに

ある文献を国語史料として用いるための基礎作業の一つに、成立年代の確定がある。しかるに、本稿で問題とする抄物に限定して言えば、写本・版本を通じて、年記を有する史料はむしろ稀である。更に、手控・聞書・類纂を通じて、転写本や版本の作成者による改変もまた、それが意図された結果であると否とに問わず、独自の史料価値を有しているとする立場で対するならば、年記を付さない文献についてその成立年代を確定することは、やはり必要な作業というべきであろう。それは当該言語事象について、少なくとも原姿の下限を決定する意味をもつ。

ところで、清原宣賢の講授聞書に基づく古活字版毛詩抄もまた、刊年を記さない史料の一つである。未だその出版年月を確定するには至っていないけれども、本稿では、それを探る手続きの過程で得た書誌面の諸特徴に焦点を絞って言及しようと思う。ここで示した結果が古活字版作成の方法として一般的かどうかを直ちに判定することはできないけれども、少なくとも、いわゆる本能寺門前版（長沢規矩也編『日光山「天海蔵」主要古書解題』（以下入解題）

と略称)における呼称に拠る)の解明には、若干の示唆を与えるであろう。

二 抄物の古活字版

出版が事業として成り立つには、それを支える需要が前提となる。片仮名交りの注釈書たるいわゆるカナ抄は、漢注本に比し多分に啓蒙書性格を帯びており、政策的な意図によるのではなく、享受層からの要請に依る出版であったろうことは、それがいわゆる坊刻本であったことから窺えよう。従って、出版はその時点での当該文献享受の状況を計る尺度ともなるものである。

抄物の古活字版を見ると、国書では御成敗式目・錦繡段、漢籍では大学・中庸、仏典では無門関、医書では全九集などの抄が多くの版を重ねており、整版の形態を採るようになっても、大勢は変らなかつたようである。参考までに、抄物の版本を古活字版に限って列記しておく。

書名は原則として巻頭に拠る。

有刊記版は原刊記を「」で記し、無刊記版は匡郭及び抄文の行数によって区分する。書誌的には開版年月の差も考慮すべきであろうが、ここでは版式面での比較的明瞭な差異に基づいて区分するに留めた。従って、開版の先後とは直接関係しない。なお、原刊記中の「刊」を「刊」で代用した。

配列は国書・漢籍に次ぎ、仏典・医書を別掲する。特に医書は、特殊語彙の史料としても、今後の研究に俟つことが大きい分野であるから、仮名書きされている文献は、いわゆる抄物の形態を採らないものも含めた。

この項は、その大半を川瀬一馬博士の『^増古活字版之研究』(以下人研究Vと略称)に依拠している。その他、影印本『中華若木詩抄』(勉誠社版)所収の「抄物研究図書論文目録」(中田祝夫・今村千草編)記載の諸論文に拠り補ったものなどについては、原則として注記を加えなかつた。未見の版もあり、整版との関係など、なお調査の要ある未定稿である。

錦繡段鈔 五卷 (月舟寿桂)

- 「寛永六年仲呂上旬 二條観音町中嶋久兵衛開之」
双辺一二行本。

覆刻整版に寛永九年版(極稀に配字を改め、改変を施す)があり、これを基に経文を大字に改め、抄文を覆刻する同二〇年版(慶安二年後印本。但し、一部に新刻を交う)がある。

- 「于皆元和九^癸曆中秋上旬 女佐開」单辺一三行本。
- 無刊記。单辺一三行本(二版)。
- 無刊記。双辺一三行本。
- 無刊記。双辺一四行本(二版)。

△研究Ⅴ未載の別版(同種の活字使用)に、国立国語研究所蔵の完本並びに卷一〜四の有缺本がある。序1の版心「錦抄序」に対し、完本のみ「錦抄卷序」とある。従って、別版が初版であり、完本はその初印であろう。

続錦繡段鈔 五卷 (継天寿齋)

- 無刊記。双辺一三行本。
整版に承応三年版がある。
- 中華若木詩抄 四卷 如月寿印

○ 無刊記。双辺一七行本。

○ 無刊記。双辺一八行本。

整版に寛永一〇年版・(覆寛永) 正保四年版・延宝七年版がある。

日本書紀「神代卷」抄 二卷 清原宣賢

○ 無刊記。单辺一四行本。

版心に上・中・下とあり、三卷本とも呼ばれているが、上巻巻頭「卷第一」下巻巻頭「卷第二」と、次掲有刊記版踏襲の名残りを留めており、二巻三冊本と称してよからう。

○ 「於洛陽本能寺前町開板」双辺一六行本。

享祿四年の講釈に基づく旨の識語を有する寛永一七年刊整版「日本紀神代抄」一一巻本は別系統。

御成敗式目抄 二(三)卷 清原宣賢

諸版巻頭に書名なく、尾題に「御成敗式目抄」とある。

○ 「元和第七年霜月吉辰」单辺一二行本。

○ 「寛永元年八月吉辰」单辺一二行本。

○ 無刊記。单辺一二行本(四版)。

△研究Ⅴに第二種二版・第三種二版とあるもの。但し、第二種本は未見で、別種とする根拠不審。

○ 無刊記。单边一三行本(三版)。

△研究Vに第四種(イ)版とあるものは、数箇所濁点付活字を混す。整版に寛永一二年版などがある。慶

安元年版などの平仮名交り本は別系統。

職原私抄 二卷 清原宣賢

○ 「寛永四年^{丁卯} 秋九月吉辰 二兵衛^{開之}」 双边一二行本。

覆刻整版に寛永五年版がある。

庭訓「往来」鈔 二卷

○ 無刊記。双边一二行本。

○ 無刊記。单边一三行本。

東洋文庫蔵本がある。△研究Vは前項の版と誤認。

整版に寛永八年版・慶安二年版・承応二年版(平仮名交り本)などがある。

周易抄 六卷 柏舟宗趙

○ 「於洛陽本能寺前開板」 双边一五行本。

尚書「抄」 一三卷 清原宣賢

○ 「于時寛永元^{甲子} 歲卯月吉辰 二兵衛開板」 单边一

三行本。

毛詩抄 二〇卷 清原宣賢

○ 「於洛陽本能寺前町開板」 双边一六行(混一五行)本。

大学章句「抄」 一卷 清原宣賢

○ 無刊記。单边一一行本。

○ 無刊記。无边二二行本。

○ 「寛永二年」 刊。单边二二行本。

○ 無刊記。单边二二行本。

○ 無刊記。双边二二行本。

○ 無刊記。单边一六行本。

覆刻整版に、相互覆刻の寛永七年版(二版)・無刊記版がある。

中庸(私抄)章句「抄」 二卷 清原宣賢

○ 無刊記。单边一一行本。

○ 「于時寛永二曆重光作鹽初春吉辰」 本屋」 意齊 開板焉」 单边二二行本。

○ 「于時元和七曆重光作鹽仲冬吉辰」 本屋」 二兵衛

開板焉」 单边一三行本。

○ 無刊記。单边一三行本。

○ 無刊記。单边一六行本。

覆刻整版に、相互覆刻の寛永七年版・同九年版・無刊記版がある。

論語抄 一〇巻 清原〔秀賢〕

○ 無刊記。単辺一八行本。

○ 無刊記。双辺一八行本。

孟子〔抄〕 一四巻 清原宣賢

○ 「於洛陽本能寺前開板」双辺一八行本。

完本に桜山文庫旧蔵本がある。

史記〔抄〕 一九巻首一卷 桃源瑞仙

○ 「寛永三丙寅年閏四月下旬 陰山支佐行板」双辺二二行

本。

三略秘鈔 三巻 清原宣賢

○ 無刊記。双辺一三行本(二版)。

毎行二三字本と二四字本とがある。整版に寛永四

年版がある。

六韜秘抄 六巻 清原宣賢

○ 「于嵯寛永元甲子年初冬吉辰 玄佐開板」単辺二二行

本。

(標題徐状元補注)蒙求〔抄〕 七巻 清原宣賢

○ 無刊記。単辺一三行本(二版)。

従来同一の版とされていたもののうち、京都大学
付属図書館蔵本は同種活字の別版で、こちらが初版
か。

再版の覆刻整版に、寛永一五年版(一〇巻。無刊
記後印本)がある。

莊子〔抄〕 一〇巻 清原宣賢

○ 「寛永元年以前」刊。単辺一三行本。

尚書抄並びに「于時寛永元甲子歳仲夏下旬 開板之」とある明德記三巻に類似の版式。加えて、後者の阿波国文庫旧蔵本(弘文荘古活字版目録)(以下人目録Vと略称)三二四)原表紙裏張りに、莊子抄(八17才——上表・八18ウ——中表・八16ウ——中裏・九10才——下裏)・尚書抄(一〇4ウ——上裏・一〇1ウ——下表)の摺遣りが用いてある。整版に正保二年版がある。

長恨歌〔抄〕 一卷 清原宣賢

○ 無刊記。双辺一一行本(四版)。

人研究Vに第一種本とあるもののうち、東洋文庫蔵本は同種活字の異植字別版である。

○ 無刊記。単辺二二行本(二版)。

△研究Ⅴに龍門文庫蔵本を双辺一二行本と記す(八〇八頁)が、図録篇に拠ると単辺である。しかして、この版式のものに、次掲本と配字を等しくする別版があり、無刊記の整版本はこれに基づく覆刻である。

○ 無刊記。単辺上下双辺一二行本。

四河入海 二五卷 笑雲清三

○ 無刊記。単辺一七行本。

三体詩〔抄〕 七絶四卷・七律一卷(卷二之一〇四)・五律

一卷(卷三之一一五) 雪心素隱

卷頭書名「増註唐賢絶句三體詩法」「唐賢七言律詩三

體家法」「増註唐詩五言律句三體家法」、元和八年の原跋

(卷二之四末)の下に「素隱鈔」とある、いわゆる三体

詩素隱抄。

○ 「元和八年」刊。双辺一七行(混一六・一八行)本。

覆刻整版に寛永一四年版〔西田勝兵衛尉開板〕

本。「野田庄右衛門」後印本)がある。

○ 「寛永第三^{丙寅}季秋念七 木室三兵衛尉刊行」單

辺一六行(混一七・一八行)本。

○ 刊年不明。単辺一六行本。

卷二之四以下の有缺本(△目録Ⅴ三三六)を存す。前掲本とは配字を異にし、稍々肉太の活字を使用。刊記の有無は不明であるが、△研究Ⅴ(三六七頁)に別項を立て、寛永中刊として掲げる有缺六冊本と同版か。

三体詩絶句鈔 六卷 鹽頼宗和

○ 「元和六年」刊。双辺一二行本。

覆刻整版に無刊年版がある。訓点・濁点の類を新

添せず。

(魁本大字諸儒箋解) 古文真宝〔後集抄〕 一〇卷 笑雲

清三

○ 「元和三年丁巳孟春如意珠日」於雒陽刊行焉」單辺

一八行本。

○ 「於洛陽本能寺前開板」双辺一八行本。

ともに大永五年の原跋を有し、尾題に「笑雲和尚

古文真宝之抄卷之幾終」とあるもの。後者の覆刻整

版に無刊記版がある。

(魁本大字諸儒箋解) 古文真宝〔後集抄〕 一〇卷

○ 無刊記。双辺一一行本。

○ 無刊記。単辺一三行本。

東洋文庫蔵本などがある。A研究Vは前項の版と誤認。

笑雲抄とは別系統であり、寛永七年版などの整版とも別。

〔禪宗〕無門関〔抄〕二卷

○ 「元和八戊戌 歲立夏吉辰 洛陽 存故刊之」 双辺一二行本。

○ 「寛永元甲子年立夏吉辰 加校合 洛陽重刊」 双辺一二行本。

○ 「寛永二年極月吉辰加校合 洛陽重刊」 双辺一二行本。

○ 「寛永五年初夏上旬加再校 洛陽重刊」 双辺一二行本。

○ 「寛永八辛未年中冬下旬加再畢 於洛陽刊之」
いわゆる春夕抄で、覆寛永元年刊本の整版に寛永二年版(相互覆刻二版)があるほか、同一〇年版・

正保三年版・慶安元年版などがある。
真歇和尚拈古之抄 一卷 〔万安英種〕

○ 「寛永十九年卯月 吉日」開刊之者也」单辺一三行本。
整版に承応二年版がある。覆刻か。

〔類証辨異〕全九集 七卷 曲直瀬道三編
○ 無刊記。单辺一二行本。

配字を等しくする整版に無刊記单辺一二行本がある。

○ 「寛永元年以前」刊。双辺一二行本。
○ 無刊記。双辺一二行本(二版)。

A研究V未載の別版に、有缺本(巻一・二・五・七存)がある(A目録V二五五)。

整版に元和八年刊单辺一二行本・寛永一〇年孟春刊双辺一六行本・同年孟夏刊双辺一二行本・敦賀屋久兵衛刊無刊年单辺一五行本・万治四年刊单辺一六行横本(元禄一二年刊後印本)などがある。先の無刊記单辺一二行本は、元和版・寛永一〇年孟夏版と相互に関連があるか。なお、慶長一三年刊古活字版があるという。また、同名の文政元年版は、田沢伸舒校の漢文別解である。

日用灸経 一卷 曲直瀬玄朔
○ 「寛永八辛未歲仲春吉辰重刊」 双辺九行本。

整版に寛永一〇年版・同一九年版・承応四年改などがある。

針灸指南 二卷

○ 「慶長一三年以前」刊。双辺一〇行本。

察病指南抄 三卷

○ 無刊記。双辺一二行本。

○ 無刊記。单辺一三行本。

濟民記 三卷 曲直瀬道三

○ 「元和丁初春日於大黒町刊」单辺一二行横本。

△研究V未載。濁点付活字混用。次掲本は版心の左右に野を付さないが、野を付し配字を等しくする別版である。

○ 無刊記。单辺一二行横本。

整版に刊年不明单辺一七行平仮名交り横本がある。

格致餘語抄 四卷

○ 「寛永三年歳舎丙寅初秋良日 梅寿刊行」双辺一二行本。

整版の寛永一三年版・同二一年版(以上五卷本)。

萬治三年版(八卷本)は単なる翻印ではなく、独自の増補本文を共有する。

医方大成論抄 二卷

○ 無刊記。双辺一三行本。

明医雜著抄 三卷

○ 「梅寿刊行」

退齡小児方 一卷 曲直瀬道三

○ 「寛永七年以前」刊。双辺一二行本。

覆刻整版に寛永七年版があるほか、承応二年版・貞享五年版がある。

授蒙聖功方 二卷 曲直瀬道三

○ 無刊記。無辺一四行本。

惠徳方 三卷 曲直瀬玄朔

○ 「寛永四年以前」刊。单辺一二行本。

整版に、寛永四年版・同一〇年版・正保四年版などがある。

局方撥揮抄 二卷

○ 「于岩寛永五_{戊辰}曆長夏下旬 刊行之」

○ 「寛永五_{戊辰}辰年七月吉日」双辺一二行本。

延寿撮要 一卷 曲直瀬玄朔 平仮名交り本。

○ 「意齋道啓刊行」無辺九行本。

○ 無刊記。無辺一〇行本。

△研究V未載。次項と配字を等しくする同種活字使用の異植字版。

○ 無刊記。単辺一〇行本。

○ 無刊記。無辺一一行本(三版)。

○ 整版に、寛永七年版・同九年版・万治三年版などがある。

美濃医書 一卷 曲直瀬道三

○ 無刊記。一四行本。

本草序例抄 七卷官爵一卷 吉田意安

○ 「元和九年癸亥五月吉辰三条白壁町馬淵屋吉兵衛版」

○ 双辺一三行本。

○ 覆刻整版に寛永一八年版がある。

和名集并異名製劑記 二卷

○ 「元和九年歲合亥季春良日梅寿疏之以刊行」双辺二二行本。

○ 「寛永二乙丑歲初夏吉日」単辺一三行本。

○ 前者は濁点付活字混用。整版に寛永九年版・同一年版・正保三年版・承応二年版などがある。

三 毛詩抄の版式

本能寺門前版の刊記は、次の二類三種に分けられる。

一 (1) 於洛陽本能寺前開板(周易抄双辺一五行・孟子抄双辺一八行・古文真宝抄双辺一八行)

(2) 於洛陽本能寺前町開板(毛詩抄双辺一六(混一五)行・日本書紀抄双辺一六行)

二 寛永第五^{戊辰}曆菊月廿一日」於洛陽本能寺前刊行焉(漢書双辺一〇行注文双行)

これらの有刊記版に対し、無刊記版の中にも、同所の開版と思われる版のあることが報告されている。先ず川瀬氏は、論語抄双辺一八行本が「孟子抄と同種の活字印本と認むべきもの」(八研究V七一二頁)とされる。また八解題Vは、論語抄單辺一八行本について、「活字のうち「ソ」字の特徴は「周易抄」、大字は「古文真宝之抄」に近似している。或は慶元間、本能寺門前町刊する所か」(八〇頁)とする。更に阿部隆一氏は、史記(八研究V第二種本)及び後漢書(寛永二年前刊)に、前記漢書と同種の活字が使用されたとされた(慶應義塾図書館蔵)

和漢書善本解題』一三八頁）。△解題△はこれに加え、尚書（△研究△第一種本）についても、使用活字や版式が「後漢書と共通であるから寛永頃本能寺門前の印行か」（八〇頁）とする。いずれもその道の権威の見解であり、殊に論孟・前後漢書を一对として開版することは最も自然なことに思えるけれども、これらにも界線の有無・匡郭の寸法・版心の魚尾などに版式面での差異が認められるから、素人目にこれを一所の開版と断言するには、なお慎重を期したい。特に今回は、より精密な検討が要請される使用活字についての認定を必要とする問題には、原則として立入らないでおこうと思う。

なお、川瀬氏によると、後漢書には異植字版があるという（△研究△九五四頁）。但し、根拠とされた「光武帝紀第一上」初葉の図版は二版とも採録されておらず、その状況は不明である。当該箇所を、桜山文庫旧蔵本（八目錄△三四六）と、学習院大学国文学研究室蔵本とで比較すると、前者に「仍道縣……」……冷號春陵」とある注文中の誤植を、後者は左右差替えて訂正するという小異がある。しかしこれは異植字版とは呼ばない。

さて、有刊記版の版式で、毛詩抄に最も近似するのは周易抄と日本書紀抄である。ところで、毛詩抄の毎半葉の行数は、三一〜26のみ一五行で、他は一六行という特異な形態を採っている。この不自然な状況についての素朴な疑問を契機として、毛詩抄の植版は卷三から行われたこと、摺版は合計九面を使用したこと、植版・印刷の一工程に用いる摺版は二面が普通で、三面がこれに次ぎ、稀に四・五面を用いたこと、後半は常時二巻の製作が平行してなされたこと、上記三抄は周易・毛詩・書紀の順に継続して印行されたことなどを論ずるのが、本稿の骨子である。この調査に当り、周易抄は内閣文庫本、毛詩抄は桜山文庫旧蔵本、日本書紀抄は宝玲文庫旧蔵本を用いた（以下、各々の底本を△易抄△詩抄△紀抄△と略称）。現存本の総てについて確認は行っていないけれども、毛詩抄の京都大学清家文庫本・図書寮本・龍谷大学本・東京教育大学本（勉強社影印本に拠る）、日本書紀抄の学習院大学国文

学研究室本(高木文庫旧蔵本)の範囲では誤植などの訂正に小異が見られるに留まり、諸本同版である。

摺版は植版を重ねるに依じて、様々の缺損を生む。毛詩抄に用いられた大半の摺版並びに活字は、いずれも既在使用中のものを襲用しているけれども、そこに認められる缺損状態は、本抄二〇巻の植版の間に明らかな伸展を見せる。そこで、植版順序を探る手懸りを、版心並びに匡郭のうち版心と常に固定して用いられる上枠に求め、検討していくこととする。摺版九面は、四周双辺、黒口、双魚尾、「毛詩抄(巻)幾(丁)幾」の植字という、通常の書誌的解説の範囲内では一致している。しかし細部ではいくつかの差異が認められる。先ず、象鼻と魚尾との間を、左右の野と直角に交わる一線で画するもの四面(Aグループ)と、そうでないもの五面(Bグループ)とがある。初出の順を追って番号をつけると、

Aグループ A 1 (一1) A 2 (一4) A 3 (二11) A 4 (四30)
 Bグループ B 1 (一2) B 2 (一7) B 3 (二40) B 4 (一58) B 5 (三1)

となる。更に、上枠中の外枠が極太(約3mm)のもの(A 3・B 2~4)、花卉を陰刻する花口を上魚尾に用いるもの(B 2~5)。B 1にも、中央左寄りに白地の部分が一箇所認められるが、花口の名残りではあるまい)、同じく下魚尾に用いるもの(B 3。B 2にも、中央左寄りに疑わしい白地の部分が一箇所存する。また、Bのその他の魚尾は、1を除き缺損が著しく、判定が困難であるけれども、B 2~5は上魚尾と対の花口を有する筈である)があつて、他と区別される。なお、魚尾の凹部は左右二対計四連の波線に刻してあり、(型と仮称する)、左右一対計二連の斜線からなるV型のものはない。また、匡郭内の平均寸法は、一五行の部分も殆ど差がなく、A 1・2が22・4×17・0、A 3が22・4×17・3、A 4が22・5×17・1、B 1が22・3×17・1、B 2~4が22・3×17・6、B 5が22・3×16・1(単位cm)であり、各摺版とも、2、3mmのゆれが見られる。

このような特徴を有する各摺版は、次表のように使用されている。

卷 丁	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇
1	49	●	▲	●	*	●	■	▲	▲	■	▲	○	□	○	☆	○	○	▲	△	△
2	50	○	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	●	△	△	△
3	51	●	▲	●		●	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
4	52	▲	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
5	53	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
6	54	●	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
7	55	△	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
8	56	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
9	57	△	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
10	58	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
11	59	■	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
12	60	●	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
13	61	△	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
14	62	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
15	63	●	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
16	64	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
17	65	▲	△	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
18	66	■	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
19	67	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
20	68	○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
21		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
22		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
23		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
24		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
25		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
26		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
27		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
28		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
29		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
30		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
31		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
32		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
33		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
34		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
35		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
36		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
37		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
38		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
39		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
40		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
41		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
42		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
43		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
44		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
45		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
46		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
47		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△
48		○	▲	○		○	■	☆	☆	■	☆	○	□	○	△	○	○	△	△	△

(注) 各摺版を下の記号で示す。

- A 1 ● 2 ▲ 3 ■ 4 ★
 B 1 ○ 2 △ 3 □ 4 ☆ 5 *

本能寺門前版の版式（土井）

摺版	卷															合計					
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五		一六	一七	一八	一九	二〇
A 1	13	24	21	20						6	6	9		8		10	11	2	14	7	151
A 2	5				2	14	14	1	12	8	2	12	5	3	15		7	4	14	8	126
A 3	11				13	4	1	15	2												46
A 4				6																	6
B 1	11	24	19	20						5	5	13		8		11	13	17		5	151
B 2	21												16		15			5	15	8	80
B 3	4				2	17		17	7	2	6	2	13	6	1	10	7	17		3	114
B 4	3				12	2	15		12	7	4	11		4	2	11	13	18		6	120
B 5			1																		1
A計	29	24	21	26	15	18	15	16	14	14	8	21	5	11	15	10	18	6	28	15	329
B計	39	24	20	20	14	19	15	17	19	14	15	26	29	18	18	32	33	57	15	22	466
合計	68	48	41	46	29	37	30	33	33	28	23	47	34	29	33	42	51	63	43	37	795

これを摺版毎に整理すると、上表の結果を得る。
これによって、

I A 1・B 1の二面を主として用いる巻——二
く四

II A 2・A 3のいずれか一面と、B 3・B 4の
いずれか一面とを主として用いる巻——五く九

III その他の組合せによる巻——一・一〇く二〇
の三グループに区分することができる。摺版の種類
を無視すると、特定の摺版（二面く四面）をほぼ同
数ずつ用いる傾向のある巻とそうでない巻などの区
分も可能であるが、巻の順序も考慮すると、右の区
分となる。そうして、これが有意の区分であること
は、本抄がI↓II↓IIIの順に印刷されたことを証明
すれば明らかであろう。即ち、IくIIIは印刷におけ
る単位であったことになる。

そこで、各摺面に反映した不整部分や版心に用い
た活字を手懸りとして、印刷順序の検討を行おう。

Iグループ(使用摺版A1・A4・B1・B5——A1・B1は、ともに新彫の版心)

このグループの印刷は、三巻に共通するA1・B1二面の缺损部分の伸展を手懸りに、三→四→二の順に行われたと推定される。以下、二面の特徴を述べよう。

△A1V三で、内枠左端4丁まで2mm脱落、6丁以降5mmの脱落となる。下象鼻中央、上から9mmの位置に。の缺损。「毛」字、18丁以降第四面撥ねの部分の長い別字を異植。四に至り、上魚尾・横野間の左野が新たに脱落。二では、内枠の右端から25mm中寄りの部分に、9丁以降切れ目を生じ、その左側の尖端が外枠側へ彎曲し、外枠に接することもある。魚尾・横野間の縦野は、四箇所とも脱落することが目立ち始める。

△B1V三で、内枠右側の、版心から33mmのところ、2mm前後墨付きの薄いものと、脱落するものがある。左野の内枠から1mmの部分に1mm脱落、同じく左野の上象鼻中間部に1mmほど(型の切込みがあり、31丁以降多く脱落となる。下魚尾の凹部は、左二連の部分に37丁あたりから損傷が目立ち始める。「毛」字、19丁以降第一画払いの部分が分蘖し、第四面縦線下部が1mm脱落する別字(三12ウ7などに使用)を異植。二では、上象鼻中間部の右野が、22丁以降4mm脱落。

右の二版に対し、既に使用中のA4(初出の四20、「抄」缺)・B5を一部に用いるに留めた理由は何か。A4の場合、その位置の植版に用いる筈の前々丁使用の摺版が未だ印刷中のため、代用されたことが考えられる。しかるに、当該箇所を見ると、例えばA4の用いられた20丁の前では、17丁「縹」三字が18丁に襲用(17オ11↓18ウ10、17ウ6↓18ウ12、17ウ16↓18ウ14)され、18丁に新出の二字を加えたものが19丁に襲用(18オ1↓19ウ4下、18ウ10↓19ウ4上、18ウ12↓19ウ3、18ウ14↓19ウ2、18ウ15↓19オ2)されていて、前々丁印刷後に前丁の植版が完了している。同様のことは、25丁の前の23・24丁の「叔」「燃」、33丁の前の31・32丁の「齊」、40丁の前の38・39丁の「壇」「壇」などについても言えるから、前丁の植版完了は、いずれも前々丁の印刷終了後ということになる。しかし、前々丁には、右に挙げたほかに、新彫を必要とした特殊な文字が少なくないから、その植版には手間取ったことが考え

られ、前丁の植版も活字の鑿用を予定する箇所埋め木（いわゆるゲタの状態）を施して、前々丁の印刷終了以前に植版を終えたこともありえよう。一方B5の場合は、横幅が他に較べて約20mm狭いけれども、この時点では一五行の植字であって問題がない。後出のA2にしても、上枠と左右の枠との間に、約5mmの空きのあるまま使用されている。従って、B5が一回のみの使用に留まった理由は不明である。

次に、常時使用の二面の順序がほとんど一定しているところからすると、植版と印刷とが一面ずつ平行して行われたものと考えられる。但し、三の初めは、同一活字が「母」(1ウ15・2オ2・3ウ5)「無」(1ウ14・2オ3)「齊」(1オ6・2オ5)などと用いられているから、一丁ずつ工程を終えていくという手探りの状態であったと思われる。また特殊文字が二丁に互って頻出する場合なども、前丁の印刷を終えて、その活字を転用することは右に見たとおりである。

II グループ (使用摺版 A2・A3・B3・B4)

植版が巻を単位とし、常時一卷ずつ行われたとすると、A2に見られる「毛」字の差替えが、巻八と巻九とで逆の状態を呈するなどの矛盾が生じるのであるが、常時二巻の作製を平行して行ったとすると、右の矛盾は解消する。その作製順序は次表のように考えられる。使用摺版を併記して示す。

この表は九の後半を缺いており、IIグループの総てを尽してはいない。これは九の後半と平行してIIIグループの植版が始められたと推測されるからであって、IIIグループの項で一括して述べる。

さて、IIグループの植版が、表のごとくa・b二系列に分れることは、各摺版についての以下に述べるような特徴に基づく推定である。

卷	b			a			卷	
	丁 数		摺 版	摺 版	丁 数			
	計	丁			丁	計		
六	3	1~3	(B 4) (A 2)	(A 3) <B 3>	1~3	3	五	
	4	4	(B 3)	(B 4)	4	4		
	26	5~26	<A 2> B 3	A 3 <B 4>	5~26	26		
	27	27	(B 4)	(A 2)	27	27		
	28	28	B 3	A 3 <A 2>	28・29	29		
八	30	29・30	(A 2) B 3	<A 3>	1	30	七	
	31	31	(A 3)	(B 4) (A 2)	2・3	32		
	68	32~31	B 3 <A 3>	<A 2> B 4	4~12	71		九
	69	32	(A 2)	B 4 (A 3)	13・14	73		
	70	33	<B 3>	<A 2>	15	74		

(注) 摺版の配列は、他系列へ移るものを含む部分は末尾の順、他系列から移ったものを含む部分は最初の順に従って掲げる。

前者の摺版に〈 〉、後者の摺版に () を付す。
 () は初出。一面のみの植版の後、再度他系列に移る場合は () で示す。

△A2V初出時点で、上梓の左側中間部に、左上から右下にかけて、それぞれ、外梓と内梓とに相接する彫り損じを存す。下魚尾凹部は左三連不整。「六25↓五27」丁数「二十五」のうち、「二十」を残し、「五」を巻数標示に移植。「五29↓六29」丁数「二十九」共通。従って六の巻数標示は25と29とで相互に異植字となる。「九1↓11」1以降、下象鼻右野の上から4mmのところに、1mm幅の(型の切込みを生ず。11以降、「毛」字第四画の曲りの部分が滑らかな異植字となる。なお、前巻あたりから、捺しの弱い摺面で、巻数標示部・下魚尾直上の左野に、3~5mmの脱落が目立ち始め、下魚尾凹部の損傷も、左二連が特に著しくなる。「九11↓八32」丁数のうち「十」共通。「八32↓九15」同じく「十」共通。但し、九を通じて、巻数「九」は總て共通であり、九9↓八32↓九11という移行も考えられる。しかし、九12・13とB4を連続使用するなどの点からも、先のこ

とく見るのが自然であろう。

△A3▽下魚尾凹部左三連の損傷は、A型の中で最も著しく、初出時から八にかけて徐々にその度合を深めるが、その他の欠損には、特に変化が認められない。「八31↓九14」「毛」字、14丁以降B4が九12まで使用のものを移植。上魚尾凹部右側第二線に4mmの切込みを生ず。

△B3▽内枠左側第12行の部分に8mm、第15行の部分に6mmの脱落が六8以降目立つ。同じく内枠右側も八9以降3mm脱落。

△B4▽損傷の最も著しい摺版で、版心の野線は、特に魚尾間の印刷面に現われないことが多い。下魚尾凹部も、左の第一線は野の部分を残すのみで殆ど脱落し、第二線も殆ど痕跡を留めない。右二連はノのごとき斜線状を呈し、象鼻の上に直角三角形を重ねたように見える。「詩」字も偏の「ロ」の部分の縦二画と、旁の「土」の部分の横二画間を欠く缺画字を植字。六2～五前半は、欠損に特に変化なく、五22以後外枠右側第12行の部分に、∪型の損傷を生ず。「五26↓六27」丁数「二十六」のうち、「二十」を残し、「六」を巻数標示に移植。「六27↓七2」丁数「二十七」のうち、「二」を残し、「七」を巻数標示に移植。七18以降、外枠左端の部分に▽型の欠損を生じ、∠の斜線で縦枠に接していたものが、∠の斜線状となる。九13以降の「毛」字、A3が八31まで使用のものを移植。即ち、九13・14の植版時に、B4・A3の活字は相互に差替えとなる——原因は不明。

右の状況から推して、IIグループの作製がa・b二系列から成ることは、ほとん間違いなであろう。ところで、

I・IIグループの先後は、摺版を全く異にするから、右の状況からは推測できない。しかし、IIグループ摺版の版心に固定して用いてある活字がIグループの本文に用いてあれば、その先後を確定できる。なお、I・IIグループの摺版はそのままIIIグループに襲用され、版心の活字も一部の差替えを除き連続するから、IIIの先行はありえない。そこで、IIグループ版心の初出時の活字をIグループに求めると、

A2「毛」——二10ウ3・四43オ11 「詩」——三41ウ8・四44ウ2

A3「毛」——二8オ4下 「詩」——三尾題・四41ウ16

B 3 「毛」——二12ウ3・四15ウ14 「詩」——二5ウ14

B 4 「毛」——二6オ4 「詩」——四39ウ16

などが同一活字のように思われる。「毛」「詩」のように頻出する文字は、活字の本数も多く、それだけ酷似する字形も少なくないから、異同についての判断も慎重を期さなくてはならないけれども、B 4「詩」(右のほか、四3ウ3・10ウ9・15ウ12・32オ12・35ウ2に使用)のように、缺陷のある活字の一致については断定してよいであろう。従って、IIグループはIグループの印刷終了後に作製されたと認められるのである。

次にIIグループのa系列とb系列とで摺版の交替する現象については、Iグループ四でのA 4に相当する原因が考えられる。第4丁の交替に関して、それぞれの第1・2丁を見ると、

a 五1△B 3▽蠶(5) 五2△A 3▽鶏(4)・雞(6)

b 六1△A 2▽夤(2)・雙(3)・僖(5) 六2△B 4▽蟋蟀(5)・蜻①(2) ①——冠「列」脚「虫」

と、一部新彫を必要とする頻度の低い文字をそれぞれ含んでいるけれども、第3丁の植版はaが早く終了し、その時点ではb六2△B 4▽の印刷が完了したので、a五4に空いたB 4を用いた。続いてb六3の植版が終了し、この間に印刷を終えたa五3の摺版B 3をb六4に用いたのであろう。これにa五2の摺版A 3を用いなかつたについては、この時点で既にa五5の植版に掛つていたことが考えられるけれども、あるいはIグループがそうであるように、A・Bの摺版を交互に用いることが、何らかの指標的役割を果していて、A 2・A 3と連続することを避けたのかも知れない。b六2が、a五25のA 3でなくa五26のB 4を用いたのも、同様に解される。しかし、この一見規則的な現象も九の半ばから乱れ、IIIグループでは全く認めることができない。以上第4丁の摺版交替に関して、直前の第3丁には殆ど問題がなさそうであるが、第27丁の交替は、直前のb六26に、①(4)・②(7)・③(3)・④(4)などの文字があつて植字が遅れ、且つ第26丁の印刷はbが早くに終つたので、その摺版A 2を

卷	b			a			卷
	計	丁	摺版	摺版	丁 数		
					計	丁	
九	73	1~3	(A 1) (B 1)	B 4 (B 3)	16・17	76	〇
	76	4~6	(A 2) B 1 A 1	(A 3)	18	77	
	80	7~10	(B 2) B 1 B 2	(A 2)	19	78	
	104	11~34	(A 3) A 1 B 2 B 1	B 4 B 3 A 2	20~4	96	
	106	35・36	(A 1) A 3	(B 3) A 2	5・6	98	
	109	37~39	(B 1) B 2 A 3	(A 1) B 4 A 2	7~11	103	
	116	40~46	(B 3) B 2 A 3	(B 1) A 2 A 1 B 4	12~24	116	
	118	47・48	(B 3) A 3	(A 2) A 1	25・26	118	
	120	49・50	(A 2) B 2	B 4 B 1	27・28	120	
	121	51	(A 3)	(B 3)	1	121	
	127	52~57	B 2 (A 2)	B 1 B 3 A 1	2~10	130	

製作順序には、なお未解決の点があるけれども、一往次のごとく推定する。

Ⅲグループ(使用摺版A 1・A 2・A 3・B 1・B 2・B 3・B 4)

a 527に使用したのであろう。以下の交替については、一々の例証を省略するけれども、そこにはいずれも、頻度の低い特殊な文字の頻出に伴う新彫や、同一活字の二丁に互っての使用など、一方の工程を遅らせる事情が介在しているようである。しかしこのような場合、例えばa 55に「瓊」が14字用いられているけれども、第6乃至第7丁に交替が見られないなど、常に二系列間の交替が起こるといってもよいのであつて、右に述べたことは、結果からする可能性の推測に留まることを断っておかなくてはならない。これにはその日の作業量も関係してこようし、二系列の植版と印刷という工程に携わった人物が同一かどうか——誤植の現われ方などが手懸りとなろう——など、なお煮詰めるべき問題が存する。

①——偏「イ」旁「羨」②④——偏「金」旁「尊」「享」「敦」

		<B 4>				
			B 1			
		(A 2)	A 1	27~2	221	一六
			B 3			
185	4~12		(B 4)			
		B 2	B 1	3~10	229	
			A 1			
		<B 3>				
186	13	(B 3)	B 4			
			B 1	11~17	236	
			A 1			
209	14~4	A 2	(B 3)			一八
		B 2	B 1	18~38	257	
			B 4			
			A 1			
210	5	<A 2>	<B 1>			
			<B 4>	39~42	261	
			<B 3>			
212	6・7	<B 2>	<A 1>			
215	8~10	(B 3)	(B 2)	1~3	264	一九
		(B 4)	(A 2)			
		(B 1)				
216	11	(A 1)	<A 2>	4	265	
219	12~14	(A 2)	(A 1)	5・6	267	
		B 4	B 2			
		<A 2>				
221	15・16	B 1	(A 2)	7	268	
		(A 1)				
268	77~63	<B 1>	(A 1)	8~10	314	二〇
		<B 3>	B 2			
		<B 4>	A 2			
			(B 1)			
			B 2			

			<B 4>			
128	58	(B 4)	B 3			
			B 1	11~17	137	
			A 1			
132	59・62	B 2	(A 2)			
			B 1	18~23	143	
		<B 4>	B 3			
			<A 1>			
134	63・64	B 2	B 1			二二
			A 2	1~4	147	
			B 3			
137	65~67	(A 1)	(B 4)			
		B 2	A 2	5~8	151	
		<A 1>	B 1			
			<B 3>			
139	68・1	B 2	B 4			
			A 2	9~12	155	
		(B 3)	B 1			
			(A 1)			
161	2~23	B 2	B 1			二四
			B 4	13~7	197	
		B 3	A 1			
			<A 2>			
163	24・25	<B 3>	B 1			
			B 4	8~11	201	
		B 2	A 1			
171	26~33	(A 2)	(B 3)			
			A 1	12~17	207	
		B 2	B 1			
			<B 4>			
173	34・1	<A 2>	A 1			
			B 1	18~25	215	
		(B 4)	B 3			
175	2・3	B 2	<A 2>	26	216	

(B 4)	11~22	326	七
A 1			
A 2			
(B 3)	23~32	336	
B 2			
B 4			
A 2			
B 1			
A 1			
B 3	33~37	341	
B 4			
B 1			
《B 2》			
B 1	1~12	354	
A 1			
B 4			
B 3			
B 1	13~19	361	
A 1			
B 4			
A 2	20~32	374	
B 4			
A 1			
B 1			
B 3	33~44	386	
A 2			
B 4			
A 1			
B 1			
《B 3》	45・46	388	
A 1			
《B 4》	47~50	392	
《B 1》			
《A 2》			
《A 1》			

(注) 《》は最終摺版。

以下、各摺版について述べる。

△A 1▽B 1とともに、第 I グループに次いで「冒頭から使用。版心の植字で、他系列に転じた場合、そのまま襲用されている数字を挙げる。〔二二 23 ↓ 一 65〕巻数「二」、丁数「十」共通。従って一 35 までとは異植となる。この他に確実な例は見出し難いが、一六の巻数「十」には、先行する一四が連続活字であったため、B 3 が一四で使用のものを移植している。

摺面では、内枠右側に二で生じた切れ目の尖端は、一でも外枠に接することがあるが、一〇以降遊離し、一四では人型となつて内枠右端部分と接続することが起こり、一六以降常時その状態となる。下魚尾の凹部は、一で右側第二線中央部に僅かな切込みを生じ、一〇で左側二連が時に＼の斜線状に不規則な損傷を見せ始め、一六ではその二連の接点不明瞭となり、一七に至ると、その接点の切込みの浸蝕は中央凹部の深さに達し、そのため一旦＼化した二連の(型は、それぞれが屢々V型化する。こうした損傷の深化は、匡郭や野線にも認められるけれども、摺版の疲れが進むと、墨の濃淡や捺しの強弱の差がそのまま摺面に反映するから、判断に迷うことが少なくない。

△A 2▽植字では、〔一四 7 ↓ 一三 26〕巻数「十」一七まで共通。〔一三 34 ↓ 一四 26〕丁数「四」を巻数標示に移植。従って一四 7 と一四 26 の「四」は異植字となる。〔一五 32 ↓ 一八 2〕丁数「二」共通。〔一八 5 ↓ 一九 2・4 ↓ 一八 12〕一八 5 と一八 12 の「八」は異植字。前者は一八 9 △B 4▽の誤植訂正に移植。〔一九 43 ↓ 二〇 3〕丁数「三」共通。〔二〇 32 ↓ 一七 20〕丁数「十」共通。その他、〔九 11 ↓ 八 32 ↓ 九 15 ↓ 4 ↓ 九 19〕の九は、巻数「九」と丁数「十」が三丁とも同一活字であり、

「一九二・四↓一八一二・一四↓一九七」の「九」も同一で、再考の余地を残すけれども、前者は「毛詩抄」の位置に、九一までと八二三以降とで1mm強のずれが見られる。

一摺面では、Ⅱ以来の上梓左側二辺間の彫り損じ部分は、一五まで外梓に接する左端と二辺の中間に位置する右端部分に痕跡を留め、一八以降左端のみ僅かに存す。下魚尾の損傷は、特に左二連が著しく、本来両端並びに中央凹部の高さが12mm・5mmであるのに対し、左端並びに左第二線の中の中央部に生じた切込みによる残余部分の高さが、八から一七にかけて、摺面の比較的良好な箇所平均値で、10mm・4mmから8mm・2mmへと徐々に減じている。その他、内梓の半分以下しか摺面に現われない場合が、右側は一三以降、左側は一八以降多くなる。魚尾間の野もまた、書名部分を中心に不鮮明なことが多い。「抄」字も徐々に不鮮明の度を増し、二〇・一七では、「少」の第三画が多く脱落する。

△A3V植字では「九一八↓一一一」で「十」が共通するが、使用は一五までであり、摺面に大きな変化は認められない。

△B1V植字では、「二四八↓一三」巻数の「二」を丁数標示に移植。また、「毛」字は右上りの異植字となる。「一八六一↓二〇一一」丁数「十一」共通。

摺面では、Iでの不整部分のうち、内梓右側版心寄りの脱落部分は、一二までむしろ正常な摺面が一般で、一四以降薄い場合が多くなり、脱落する場合は5mmに及ぶ。左野上象鼻中間部の(型切込みは、一六以降脱落のみとなる。同じく右野の脱落部分は、一七までまゝ)型の不連続線を存す。下魚尾凹部の損傷は、一以降右第二線にも及ぶ。左二連の損傷は特に第一線が著しく進み、側面の先端が外側に反った状態となり、一以降野線との接点を缺いたり、一四以降その先端から斜め下向きにノのごとき斜線5mm前後を生じたりする。この斜線は二〇では魚尾と遊離し、あたかも野線が裂けたように見える場合もある。その他、内梓・野にも新たな欠損が少なくなる。

△B2V他系列への移動は「一八七↓一九一」だけであり、巻数標示とともに連続活字のため襲用の例はない。新出摺版版があるが新彫ではなく、摺版の欠損が目立つ。左梓とノ状の斜線で接すべき外梓先端がノ状に脱落。加えて、二三以降15〜20mm分の摺りの不鮮明なことがある。内梓も一後半以降不鮮明な箇所が少なくなる。魚尾間の右野は巻数標示部以外殆ど欠

落、左野は巻数・丁数標示部が不鮮明、一五以降左右とも全体的に不鮮明なことが多い。下魚尾凹部、右二連はノ状、左二連は第一線の上を欠き、「状を呈する。左二連の損傷は徐々に進み、一五後半あたりからノ乃至一状となる。なお、上梓の二辺は一八七・八以降B3のものとの交換となるが、次項で述べる。

△B3▽植字では、「八33↓九17」丁数「十」共通。「二二8↓三三1」巻数「十」共通。「三三24↓四四12」「三三八」と誤植）巻数「十」・丁数「二十」共通。誤植が三三24の影響を受けていることは明らかであるけれども、「四」を巻数標示に移植し、「二十」を倒置すれば済むのに、何故「八」の誤入を招いたかなど定かでない。なお一四29も「二十八」と誤植するが、こちらは前丁が「二十七」と誤植した影響を承けたものであって、「二」「八」ともに異植字。「一四29↓一六2」丁数「二」共通。なお、巻数標示「十六」には連続活字を用い、「十四」の「十」はA1の二六5に移植。「一六10↓一五13↓一六18」丁数「十」共通。また、巻数の連続活字「十六」はこの巻を通じて共通。従って一六6↓一五13↓一六10もありうる。「一八62（七十二）」と誤植（↓二〇23）丁数「二十」は「十二」を倒置。

摺面では、外梓左端が一〇以降24mm・一一以降45mm不鮮明となることがある。一六10以降左側第4・5行の部分に裂け目が生じる。内梓も欠損が目立ち、一四以降半分以上に及ぶことがある。また一三以降二辺間の墨付きがにじみ、二辺の相接することがある。なお一六31では天地・左右を逆位置で用いる誤りを犯しており（一六9△A1▽・一八18△B4▽も同じ）、これによって、版心及び左右の梓との組合せは、上下いずれからでも可能な仕組みであったことが判る。ところで、この上梓は一八七・八でB2のものとの交換され、二〇までの状態が続き、B2の使用されない一七で、再び本来の組合せに戻っている。従って、一六↓一七↓一八という巻を追っての印刷順序がより自然のようであるけれども、後述するごとく△紀抄▽での組合せが一七と同一であるから、やはり先のごとき印刷順序と見るべきであろう。なお、外梓の裂け目は、B2に使用中の一九3・6では生じていない。野線は左右とも一以降魚尾間の殆ど脱落することが生じ、一八以降になると、象鼻部も含めた完全な脱落や不鮮明なことが少なくない。下魚尾凹部は右二連の中間に切込みがあり、八では末画の長いW型であったものが、一三あたりからノの斜線状となり、左側面の長さの平均は、八9mm・一三7mm・一六5mm・二〇4mmと

徐々に低下している。

△B4V植字では、「二一〇→一五八」丁数「十」共通。「二四一七→一五二」巻数「十」、最終巻の一七まで共通。「二五三→一六三」丁数「三」酷似。「二六四〇→一八(十七)と誤植」9「誤植の「七」は後に一七で使用のものとは一致するけれども、一七→一八は考え難い。なお、教育大学本は「十八」と正しく植字し、13丁以降に承継される。この「八」は、A2が一八5で使用した活字で、A2が一九2に移行したため空いたのであろう。「一八63(七十三)と誤植」→二〇13」丁数「十三」共通。「二〇34→一七4」丁数「四」共通。

摺面では、Ⅱで/の斜線状を呈した外枠左端が不鮮明となり、一以以降50mmに及ぶことが少なくない。外枠右側第14行の部分に一八27以降V型の欠損があり、第11・12行の部分に二〇17以降5mm内の裂け目を生じる。しかるにこの不整部分は一七には現われない。諸々の損傷がいずれもその度合を大きくしていく中であつて、これのみ例外として旧に復したと見ざるをえず、疑を存しておく。野が魚尾間で不鮮明となることはⅡから見られたが、二あたりからは象鼻部も含めて殆ど脱落することが少なくない。下魚尾の損傷は更に進み、左側面は九で7〜3mm、一で5〜3mmを存するが、二34以降脱落することもあり、存してもB1と同様に、上端が外端に反った状態となる。/の斜線状であつた右二連も一〇あたりから中寄り部分の損傷が目立ち、一ではI型となり、二以降上部左側を缺き階段状を呈する。左下端は一八40以降常に象鼻と連接する。上魚尾も九以降凹部波線の接点部分に、三箇所とも切込みを生ずる。

右のようにⅢの作製は、Ⅱと同一の方針に基づいて行われたと推測される。細部では、△B4V巻数標示・外枠右側不整部分が一七の印刷順序推定に反するなどの疑問を存するけれども、大勢は三に始まり一七に終るといふ印刷順序を支持する様相を呈していると言つてよいであらう。そこでこうした変則的な形態が認められるとして、その原因は開版に用いた写本に求められるであらう。毛詩抄の写本については別の報告に譲るけれども、底本に用いられたのは、原聞書から数次の転写を経た写本で、京都大学付属図書館蔵一一行本・国立国会図書館蔵本の系統に属する一本と考えられ、共通する誤りが少なくない。しかし独自の異文も存し、底本の誤写・誤脱の類に対し、刊

本能寺門前版の版式 (土井)

卷		一	二	三	四	五	六	上	下
丁									
1	47	×	×	☆	×	×	×	○	☆
2	48	□	□	☆	×	×	×	○	☆
3	49	×	×	☆	×	×	×	○	☆
4	50	×	×	☆	×	×	×	○	☆
5	51	×	×	☆	×	×	×	○	☆
6	52	×	×	☆	×	×	×	○	☆
7	53	×	×	☆	×	×	×	○	☆
8	54	×	×	☆	×	×	×	○	☆
9	55	×	×	☆	×	×	×	○	☆
10	56	×	×	☆	×	×	×	○	☆
11	57	×	×	☆	×	×	×	○	☆
12	58	×	×	☆	×	×	×	○	☆
13	59	×	×	☆	×	×	×	○	☆
14	60	×	×	☆	×	×	×	○	☆
15	61	×	×	☆	×	×	×	○	☆
16	62	×	×	☆	×	×	×	○	☆
17	63	×	×	☆	×	×	×	○	☆
18	64	×	×	☆	×	×	×	○	☆
19	65	×	×	☆	×	×	×	○	☆
20	66	×	×	☆	×	×	×	○	☆
21	67	×	×	☆	×	×	×	○	☆
22	68	×	×	☆	×	×	×	○	☆
23	69	×	×	☆	×	×	×	○	☆
24	70	×	×	☆	×	×	×	○	☆
25	71	×	×	☆	×	×	×	○	☆
26	72	×	×	☆	×	×	×	○	☆
27	73	×	×	☆	×	×	×	○	☆
28	74	×	×	☆	×	×	×	○	☆
29	75	×	×	☆	×	×	×	○	☆
30	76	×	×	☆	×	×	×	○	☆
31	77	×	×	☆	×	×	×	○	☆
32	78	×	×	☆	×	×	×	○	☆
33	79	×	×	☆	×	×	×	○	☆
34	80	×	×	☆	×	×	×	○	☆
35	81	×	×	☆	×	×	×	○	☆
36	82	×	×	☆	×	×	×	○	☆
37	83	×	×	☆	×	×	×	○	☆
38	84	×	×	☆	×	×	×	○	☆
39	85	×	×	☆	×	×	×	○	☆
40	86	×	×	☆	×	×	×	○	☆
41	87	×	×	☆	×	×	×	○	☆
42	88	×	×	☆	×	×	×	○	☆
43	89	×	×	☆	×	×	×	○	☆
44	90	×	×	☆	×	×	×	○	☆
45	91	×	×	☆	×	×	×	○	☆
46	92	×	×	☆	×	×	×	○	☆

本能寺門前版のうち、毛詩抄と同一の摺版を用い、連続して印刷されたのは、周易抄六巻と日本書紀抄上下二巻とである。前者はA 2・A 3・B 2・B 3・B 4の他一面(B 0とする)の計六面を使用し、後者はA 1・A 2・B 1・B 3・B 4の計五面を使用している。両者における各摺版の使用は次表のごとくである。

四 同一摺版による他抄の印刷

行者においてそれなりの手直しも施しているようである。二・一・一七における印刷順序の乱れは、こうした改変や整理作業の遅れに原因があったと思われる。

摺版	卷						合計	上	下	合計
	一	二	三	四	五	六				
A 1							18	12	30	
A 2						10	10	20	35	
A 3					28	9	37			
B 0	19	14	15	23	13	11	95			
B 1							25	3	28	
B 2		1	1	1	1	1	5			
B 3	22	16	14	24	22	10	108	26	6	32
B 4	16	14	23	23	7	21	104	8	14	22
A計					28	19	47	33	32	65
B計	57	45	53	71	43	43	312	59	23	82
合計	57	45	53	71	71	62	359	92	55	147

(注) 周易抄には、一巻頭に目録・河図・洛書(8丁、版心は「周易抄圖」、二、六巻頭に目録(各1丁)が付してある。表ではそれぞれの終りに「」を付して挙げた。

B 0は×で示す。
なお、△易抄Ⅴ三23は落丁である。

これを摺版毎に整理すると、次表の結果を得る。

摺版使用の状況は毛詩抄Ⅰ・Ⅱに該当するものなく、Ⅲに一致乃至は近似している。しかして版心の植字並びに摺面の状況から、周易抄は毛詩抄Ⅱに先行し、日本書紀抄は毛詩抄Ⅲに次ぐ開版であることが知られる。以下、抄

毎に根拠となる主たる現象を指摘する。

△易抄Ⅴ 全巻一五行(但し一図4オは一七行、4ウは一六行)であり、各摺版の匡郭内寸法は、△詩抄Ⅴに比較して横がいずれも短かく、A 2・B 0・B 4が16・0、A 3が16・7、B 2が16・3、B 3が16・2(単位cm)である(図では小異あり)。上枠は総て差替え。周易抄の印刷は、巻を追って一巻ずつ行われたと推定される。但し、二以下の目録は、全巻終了後の一括印刷か。この目録のみに使用のB 2を除くと、一、四が三面、五が四面、六が五面と、後半に摺版の増加が見られる。以下、摺版毎に検討する。

△A2▽六24以降に使用。罫・下魚尾の損傷は、△詩抄▽Ⅱ初出時に一致。「抄」字はB0(六21まで使用)が使用のものを移植。

△A3▽五17以降に使用。下魚尾の凹部は初出時で左二連が「状、右二連がノ状を呈し、左二連の内部に半月型の缺落がある。この缺落部分は、五35以降左第二線に生じた裂け目と連続することが多くなり、左第一線「、右三連ノ、と△詩抄▽初出時と同様の損傷となる。

△B0▽損傷の殆どない摺版で、魚尾は上下とも花口。左右に三対の花弁を配し、凹部(型の内側にも平行する白地を存す。他の花口魚尾も同題の(型であったことが判る。下魚尾凹部左二連の接点に、六以降切込みを生ずる。

△B2▽目録のみに使用。△詩抄▽Ⅲ初出時と一致。

△B3▽初出時では、枠・版心ともほど正常に近い。下魚尾も凹部波線にやや不鮮明なところがあるが、左右に三対の花弁を存し、四で五枚、五で四枚と減じ、六では三ノ一枚となって△詩抄▽に連続する。凹部の損傷も、三で▽型に近く変形する。このうち左二連は五で中間部に切込みを生じ、六では第一線上部を缺いて「型となることがある。右二連は中寄り部分の損傷が進み、ノの角度が徐々に急となる。

△B4▽これも下魚尾の損傷が著しく花口は確認できない。凹部中央の損傷は一半ばで既に底辺に達することが多く、左二連を中心に、巻を追って▽字型からU字型へと深化する。六8以降左右へ分蘖し、六61で△詩抄▽初出の状態に一致する。

右の状況と、使用摺版の配列から、周易抄の印刷は順次一巻ずつ行われたと推定される。これが毛詩抄に先行する開版であったことも、右に述べた摺面の状況から明らかであろう。加えて、共通する摺版五面の△易抄▽から

△詩抄▽への継承が、

△B3▽六58↓Ⅱa五1(丁数「五」を巻数標示に移植)

△A2▽六59↓Ⅱb六1(巻数「六」共通)

△A3▽六60↓Ⅱa五2

△B 4 ∨ 六 61 ↓ II b 六 2（巻数「六」共通）

△B 2 ∨ 六 目 ↓ III b 一 7

となっていること、「抄」字が五面とも襲用されていることなどから、両者の開版は連続して成されたと推定される。

△紀抄∨ 使用摺版五面は、毛詩抄の印刷最終巻と推定した一七使用のものとは一致する。摺面の状況にまでは言及しないけれども、上梓との組合せが一致すること、版心「日本抄」にA 1・B 1・B 4の「抄」字が襲用されていることなどから、これも連続する開版で上下の順に一巻ずつ印刷されたと推定される。

他の有刊記版では、孟子抄が周易抄に先行する。B 0・B 3・B 4の三面を使用しており、周易抄前半と一致。上梓は三面とも別で、B 0・B 3は新彫。原則として三面を交互に用いる工程で、順次一巻ずつ作製されている。桜山文庫旧蔵本に拠ると、一ではB 4の下魚尾凹部の波線が稍々不鮮明な程度で、他の二面は新彫に近いのであるが、一四での状況は△易抄∨初出時と一致する。両者が連続して開版されたとすると、

△B 3 ∨ 一四 31 ↓ 一四 3、または 一 2

△B 4 ∨ 一四 32 ↓ 一四 1、または 一 3

△B 0 ∨ 一四 33 ↓ 一四 2、または 一 1

となるけれども、版心の植字でそのまま襲用されているのはB 4「抄」のみで、B 0の「抄」はB 3を移植、従ってB 3の「抄」は別字の異植となっており、B 3・B 4の丁数「三」も異植のようである。そこで両者が連続する蓋然性は大きいのであるが、確定はできず、図8丁が本文に先行するか否かも不明である。

古文真宝抄（龍谷大学蔵本に拠る）の摺版はいずれもB型であるが、既出の花弁模様と同趣の花魚尾を有する摺

版は三面で、二・四下・五下に使用されており、他の巻はB1型(極稀)及び花口に一对の三角形を配するB型などを用いている(覆刻整版は一部を改変)。従って、二巻の同時印刷が可能であるけれども、様式にこだわることなく、手近かな摺版を寄せ集めて使用したという感が強く、配列も含めて初期の不規則的な様相を呈している。

これらの摺版のうち、既述のものと一致するのはB4一面のみで、二4と五下38に用いられ、「抄」字も共通している。摺面は鮮明で、孟子抄に先行する開版たることは明らかである。但し、摺版は他の諸版ともども新彫ではなく、初出時で下魚尾内側の波線を既に欠いている。従って、これに更に先行する開版を想定することが可能である。

残る漢書はA型・B1型の摺版を各数面ずつ用いているけれども、寸法が相違する他、前者は象鼻の黒口と野とが分離しており、後者は魚尾凹部中央の切込みが底辺に達していたり、象鼻が大黒口であったりなど、様式面でも小異のある摺版を使用している。

なお対としての開版が期待される論語抄は、二本ともB型の花魚尾であるが、象鼻と一体となっていて、間に空白がない。後漢書もB1型の魚尾であるが、凹部がV型であって、それぞれ別種の様式となっている。

以上摺版を通じて見た有刊記版相互の関係は、先に刊記に抛り行った二類三種の区分に依りており、第一類第一種グループに次ぎ同第二種グループが開版されたことになる。第二類漢書の開版はこれより後と考えられるけれども、別の観点からの考察を必要とするから、本稿では言及しない。

使用摺版の出入・新旧の別などに抛り、更に臆測を加え、今後の検討に俟つ項目を列記しておこう。先ず孟子抄における、使用済摺版B0・B3の使用により、これらを用いた先行版本の存在が考えられる。次に周易抄後半における、使用済摺版A2・A3の追加使用により、同抄前半の印刷と平行する他書の開版が考えられる。目録の印

刷が本文終了後であったとすると、B 2もこれに加えられる。毛詩抄 I に使用の A 4・B 5も同様であり、毛詩抄 I の作製が、周易抄後半と平行して成された可能性もある。更に、周易抄にのみ使用の B 0や、毛詩抄の開版中途で姿を消す B 5・A 4・A 3・B 2による他書の開版を、遅くとも III b 系列印刷終了以前に開始することも可能である。以上が立証されるならば、常時二組の工程を可動させるだけの規模を有していたことになろう。

五 版式上の諸特徴

問題の多い毛詩抄を中心に、本能寺門前版の考察を通じて得た版式上の特徴は、以下のごとくである。

先ず摺版では、象鼻に黒口を用いる点と、魚尾凹部が左右二対の波線からなる点が共通している。魚尾に花卉の陰刻を施さないのは、B 1と象鼻との間を野で画す A 型とであるが、その使用は主に周易抄五 17以降であるから、摺版の様式としては花魚尾を用いる B 0・2と5の系列が先行したと考えられる。この二系列の併用は周易抄五 17と70、毛詩抄二 八・九 1と12・一三 25と34・一五 4と32・日本書紀抄下 37と52などで二面の交互使用となっている、特に毛詩抄 I・II グループでは意図的な組合せのごとくであるけれども、この間にも、同系列の二面交互使用が周易抄六 1と22、毛詩抄一三 1と25などに見られ、周易抄六や毛詩抄一・一〇・一二などで二面ずつ計四面の交互使用でも、同系列同士が連続している。先に、何らかの指標的役割を果たしている可能性に触れたのであるが、乱丁を防ぐなどの実用面、体裁上の調和という応用面が期待できるとしても、意図的な行為の結果としてそれを評価すべきではなからう。殊に啓蒙書としてのカナ抄作製に美的側面は無用であったと思われ、それは魚尾の損傷が著しい B 4を一貫して使用していることや、同じく B 4の版心に、毛詩抄で缺画字「詩」を植字していることなどからも窺えよう。花魚尾は当然のことながら損傷が早い。花卉の陰刻は摺り滓で目がつまったり、亀裂を生ずる誘

い水ともなっている。そこで摺版を補充するに当って、できるだけ多くの印刷に堪えるものとして黒口の形態を採ったとも考えられる。

上枠は極太の外枠(初出時で約3mm)からなるものと、並みの外枠(初出時で約2mm)からなるものがある。版心左右の野が早くに不分明となることから明らかのように、この場合も極太であるほど長期の使用に堪える筈である。毛詩抄が周易抄から襲用した摺版は、差替えに当り、A2以外は新彫された極太の枠を用いている。これも印刷の進行に伴い、徐々にその幅を減じ、A紀抄Vでは2・5×2mmとなっている。ここにも、実用性を優先された新たな配慮を認めることができよう。

次に毛詩抄で、植版・印刷の一工程に用いられた摺版の配列を見ると、原則として

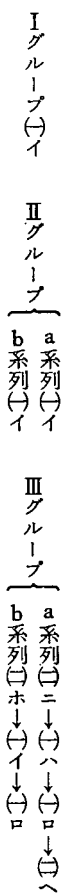
- (一) 一種類の摺版数からなる単一規則型
- (イ) 二面の交互使用——二〇八・一三・一五の計九卷
- (ロ) 三面の交互使用——一八・一九の計二卷
- (ハ) 四面の交互使用——一〇〇・二二・一四・一六の計五卷
- (ニ) 二種類の摺版数からなる複合規則型
 - (一) (イ)・(ロ)の混用——九
 - (ハ) (イ)・(ハ)の混用——一
 - (ニ) (ロ)・(ハ)の混用——一七・二〇の計二卷

の二類六種になる。但し右の法則に照して、特定摺版内部の配列まで一貫しているのは二だけであって、他の巻には、配列の変改に留らない例外が存在する。その第一は、摺版数が原則に達しない場合で、特定活字の不足などによるのであろう。なお配列の単位として示した二〇四面という数は、そのまま一回の植版数を意味しない。一回の

植版数は精々二乃至三面であつたろう。組合せに変更のある箇所になると、一八七〜12・二〇19〜24のように、異なる六面が並ぶこともあるけれども、植版数に関しては、一部検討を試みたごとく、植字面からの考慮が必要である。

例外の第二は巻頭部に認められる場合で、摺版の不整(巻三・植版方針のゆれなどに加えて、同時植版の他系列での進行状況との関連が考えられる。こうした諸原因による例外が続くと、不規則型となるもので、一・一八などにはその傾向も認められよう。

さて、摺版の選択にはその損耗の度合を平均化するための考慮も払われるであろうし、一回の植版数には保有する活字の数量からする制約のあつたことは言うまでもないけれども、こうしたことを前提としても、毛詩抄における植版は一貫性を缺いていると言わざるを得ないのである。但し、これを作製の順序に添って見直すと、



となつていて、一工程の摺版数が

一系列二面↓二系列計四面↓二系列計六面

と増加していく傾向が認められる。しかしながら他の抄では、孟子抄——(一)ロ、周易抄——(一)ロ(但し不規則型に近い)↓(一)イ↓(一)ホ、日本書紀抄——(一)ト(ロを主にイハを混用)↓(一)イとなつていて、毛詩抄の傾向に合致はしてないのである。その中にある、孟子抄並びに毛詩抄I IIは一定の方針を堅持していること、複合規制型や不規則型はその抄の首尾に現われ易いことが窺える。同じ本能寺門前版におけるこのような差異には、加動人員数や活字の量などが関係しているようし、摺版の中途での不自然な増減の意味も、これらと平行して他書の開版が行われたかどうかで變つてこよう。いずれにしても、毛詩抄後半から日本書紀抄にかけての乱れは、カナにおける大小さま

さまの活字の混用、缺画活字の使用、誤植の頻出などとあいまって、古活字版の終焉に繋がる末期的症状として捉えることもできよう。

最後に誤植に関連する問題に触れておこう。△詩抄Vの版心には、丁数標示13例・巻数標示1例の誤植がある。図書寮本・京都大学本・東京教育大学本・龍谷大学本との異同を注記して示す。

- ① 一四 12 「二十八」——「二」「八」を胡粉抹消、「二」と墨書——諸本同。
- ② 二四 27 「二十三」——「三」を胡粉抹消——図・京・教・龍は、更に「七」と墨書。
- ③ 二四 28 「二十七」——「七」を胡粉抹消、「八」と墨書——諸本同。
- ④ 二四 29 「二十八」——「八」を重ねて「九」と墨書——諸本同。
- ⑤ 二五 7 「六」——「六」の上部に「又」と活字捺印——諸本同。
- ⑥ 二六 9 「五」——「五」を重ねて「九」と墨書——図・京・教は「九」を異植。
- ⑦ 二六 12 「八」——墨筆抹消、下部に「十二」と墨書——図・京・教・龍は「十二」を異植。
- ⑧ 二七 6 「三十一」——胡粉抹消、下部に「又五」と活字捺印——諸本同。
- ⑨ ~ ⑫ 二八 60 ~ 63 「七十」 ~ 「七十三」——「七」を重ねて「六」と墨書——諸本同。
- ⑬ 二九 41 「四十二」——「二」を重ねて「二」と墨書——諸本同。
- ⑭ 二八 9 (巻数) 「十七」——「七」を重ねて「八」と墨書——教は「十八」を異植。

なお、他本のみ誤植の例に

- ⑮ 一六 2 「六十一」——訂正なし——京・龍・桜は「二」を異植。

がある。以上を整理すると、

前回使用の丁数のままで、差替えを怠ったもの——②⑥⑦

前回使用の丁数(巻数)の影響を承け、差替えを誤ったもの——①⑧⑭

前丁の誤植の影響を承け、差替えを誤ったもの——③④⑩⑪⑫

その他の誤解によるもの——⑤⑨⑬⑮

となる。なお、△紀抄▽にも

下27「十五」（但し、第15丁とは異植）——上部に「二」と墨書、「五」の第一画を生かし、「七」の第二画を補筆。

下47「四十四」——「四」を重ねて「七」と墨書。

と二箇所の誤植があり、訂正方法は学習院本・亀井孝氏蔵本とも同一。

ところで、毛詩抄における誤植の現われ方は、⑥⑦⑭⑮において相違がある。即ち、⑥では龍・桜が初摺、⑦では桜が初摺、⑭では教が後摺、⑮では図・教が初摺となる。これは扱った五本に関するかぎり、全巻を通じて初摺や後摺で統一された本のないことを示している。本文中から傍証を挙げるならば、

夕食トカイタ。程ニ朝ニハ飯ラクヒタニハ強ラクラウ（五27ウ11）

は、桜のみ「夕」と「タ」が入替っている。こちらが初摺で、他は誤植に気付き差替えたのであろう。他方

司徒ノ羅衣モタヌ事モ有マイケレトモ角云ソ（四19オ2）

の「モ」は、誤植ではないけれども、図・京・教・龍が第二画右半分を缺く不正字であるのに対し、桜は別字の異植で、こちらが後摺であらう。教育大学本には「船橋蔵書」印があり、「内容はもとより外形と伝来とが完具したものである」といって、古活字版資料としても、古口語抄資料としても、稀に見る重要典籍の一つとして珍重されるべきものである（同影印本序に拠る）という。同趣の意味でなら、京都大学本もまた「慈照寺」（朱印記あり）を介した船橋家旧蔵本であって、教育大学本に準ずる価値を有していることになる。しかし、摺面の優位性が整版同様初摺本にあるとしても、また誤植訂正の可能な古活字版における言語史料としての価値を後摺本に認めるとしても、少なくとも毛詩抄においては、特定の一本にそれを求めることはできないであらう。縦しんば摺りの先後による等質性

が求められたとしても、おそらく巻を単位とする以上には出ないであろう。

右に見た版心における誤植は質的にも多岐に亙っており、量的にも少ないとは言えない。しかもその大半が印刷終了後の訂正であることは、試し摺りによる校正のなされていないことを意味している。容易に誤植と判る版心においてすらこの状態であるから、本文中の誤植の扱いが等閑なのは推して知るべく、

上ノ行列ノ上ニ居タ時ト也廿。又敵ニ赴ク時トナリ二十人ハ少々悪ク云二十無為ニ歸ル様ニセラレイトソ（五25ウ3）——
「廿」の第三画末に加筆して「共」の草体に訂正。「二十」を胡粉抹消、「トモ」と墨書。——諸本同。

などは極めて稀な例で、活字の顛倒もまぎらわしい躍字「ノ」（二27オ1・41ウ4・六11オ10など）「ニ」（一51オ9）「ノ」（二43ウ10）を始め、「ト」（四25オ1）「ク」（五21オ5）などまでも、諸本いずれも見過ごされている。

以上のように、毛詩抄を中心として見た本能寺門前版には、古活字版の有する長所と缺陷とがさまざまな形で露呈しており、しかもその長所が長所として生かされていないところに、坊間版における質的低下という一面が窺えるように思う。やがて整版の時代を迎える元和から寛永にかけての底辺拡大は、抄物の印行にも、陰山玄佐や木室二兵衛などの優れた書肆の手に成るものまでの幅をもたらししたのである。

六 おわりに

筆者にとって、本能寺門前版についての書誌面での考察は、当該史料の開版時期を決定するための手段に過ぎない。しかも、頭初目的に対する結論は、

本能寺門前版の抄物は、古文真宝抄・孟子抄・周易抄・毛詩抄・日本書紀抄の順に、ほど連続して開版された。

というに留まるのである。これだけのことを言うためなら、諸本を通じて使用されているB4の版心における損傷

の度合を比較するだけで充分であった。敢えて限定を加えるとしても、A型版心のあり方から、寛永五年刊の漢書以前の刊行という以上に出ないのである。従って作業過程での検討事項を、有効な一点に絞ることなく縷々開陳する必要は全くなかったわけである。しかし、管見によれば、従来このような方向での検討は、少なくとも公にされていない。そこで、書誌学の門外漢が書誌面の裏付けで発言するためには、その裏付けが有効であることの証明を自ら行っておく必要があったのである。今はそれを本能寺門前版の範囲で比較検討し、いくつかの項目について類別を試みたに過ぎないけれども、こゝで示した類型や法則性は、他の書肆における開版にも、一つの基準として適用できると考える。従って今後は、これを補正することで同趣の目的解明に役立てられようから、有効な一点に絞っての証明も可能であろう。

さて、本能寺門前版抄物の開版年月の決定にとって、残された道は、同一版式による有刊記本の発見、原装本の裏張りに用いられた摺遣りの解明、書入識語の発見である。このうち摺遣りについては、阿波国文庫蔵日本書紀抄(八研究V二八二頁)・日光天海蔵蔵周易抄(八解題V七九頁)の例が報告されている。惜しむらくは、いずれも無刊記本や完本末報告の摺遣りのため、未だ有力な極め手とはなしえない。しかしながら、書入識語と並んで、莊子抄がそうであったように、摺遣りを通じての解明に最も期待がかけられよう。

最後に、莊子抄開版時期の推定に関連する問題について触れておく。明徳記の裏張りに、莊子抄とともに用いられた寛永元年刊尚書抄単辺一三行本と同じ(木室)二兵衛(尉)開版本には、なお元和四年刊城西聯句無辺一三行横本・元和七年刊中庸章句抄単辺一三行本・寛永三年刊三体詩抄単辺一六行(混一七行)本・寛永四年刊職原私抄双辺一二行本がある。こゝでは、尚書抄及びそれと開版年月の接近している後出本に限定して述べる。

先ず尚書抄の摺版は三面を数える。いずれも象鼻黒口部に接する野を有するA型に属し、魚尾は、一面が。の梅

花五単弁を中央に一個左右に二対配する花口で凹部はV型、他の二面は黒口で凹部は左右一对の(型である。摺版の配列は三面を交互に用いる()ロ型を原則とする。特に七は三面相互の配列も一貫していて例外がなく、前後の四(一も相互の配列に異同はあるけれども、二面の交互使用や同一面の連続使用回数は二割以下(延丁数は更に少となる)で、最も安定している。その他の巻は二面の交互使用が若干増加しており、特に二は28丁まで二面、29丁以降三面の交互使用である。加えて、版心「尚抄巻幾(丁)幾」のうち、二一は「抄」を缺く。従って、作製は二から始められ、その中途で()イ型から()ロ型に移行したものと思われる。他は巻順に従って作製されており、二巻以上の同時作製はありえない。

三昧詩抄の摺版は同じくA型三面であるが、野は象鼻黒口部とも分離している。魚尾は左右に三対の花弁を配する花口で、凹部は上魚尾一面が毛詩抄と同じ左右二対計四連の(型の外は、左右一对の(型である。従って、尚書抄とは異なる様式の摺版である。配列は()ロ型で、特に二之一く四・三之一く三は三面相互の配列も含めて例外がない。他の巻には、若干の例外が存するけれども、その量は尚書抄以下で、極めて規則的な配列が保たれていると言つてよい。作製順序は、版心の活字差替えや魚尾の損傷度合などから、起(首巻、七絶巻頭に合綴)↓七律↓五律↓七絶と推定される。しかして、七絶四巻は、摺版三面中一面の版心書名が三及び四55で「三体句絶」と顛倒しているところからも、一↓二↓四↓三と推定され、刊記が七絶三末にある不自然な状況も、これで説明がつくのである。

職原私抄の摺版はB型三面で、魚尾は一面が左右二対、二面が左右三対の花弁を配する花口を使用し、凹部は三面ともV型。配列は上8まで()イ型、以下()ロ型で、特に下は例外がない。

以上のごとく、各抄とも三面からなる()ロ型を本体とし、一卷ずつ作製する方法が採られている。しかし、いず

れも新彫か、または新彫に近い摺版によっていて、様式もそれぞれ異なる。同一書肆の手に成る版式でも、この点では一定していないことが知られる。なお版心に使用の活字は、尚書抄・職原私抄が同趣の小型活字を用いているけれども、前者の「巻」は草体であるなどの小異がある。このように、二兵衛版は版心にあらゆる様式を採用しており、匡郭も無辺・単辺・双辺とあって、摺版には一定の型がなく、たゞ工程に一貫性が見られるに留まっているのである。しかして上21丁中28丁下22丁から成る明徳記三巻は、裏張りに用いた尚書抄の摺版三面をそのまま襲用していて、配列は上4以降・中23以降・下18以前が二面の交互使用であって、上下が(一)イ型、中が(二)ニ型となり、先の方針と小異するけれども、二兵衛かもしくはその摺版を譲り受けた書肆の作製にかゝることは明白である。

ところで、尚書抄とともに裏張りに用いられた荘子抄の摺版は、A型四面を用いており、花魚尾はなく、その凹部は左右一对の(型である。但し、円みは小さく、野と象鼻黒口部とが分離している一面の上魚尾はV型と云ってよい。概して尚書抄の二面と同趣であり、版心の活字も近似するけれども、同一の摺版はない。しかして、この摺版のうち、右に指摘の特殊な一面を除く三面は、蒙求抄(再版本)に使用の全三面と同一であり、更に、この共通使用の一面と特殊な一面とは、玄佐開版の寛永元年刊六韜秘抄(慶應義塾大学斯道文庫本に拠る)に使用の三面中二面と同一である。そうして三者に共通する唯一の摺版の上魚尾に生じた裂け目の度合などから、蒙求抄が先行し、荘子抄がこれに次ぎ、六韜秘抄が後出本と知られる。従って、蒙求抄の開版は元和末年以前ということにならう。この上魚尾不整部分は、荘子抄一・六韜秘抄巻首付図については△研究V下巻一五四図・八〇九図、蒙求抄については清文堂影印本(四・3・10など)でも確認できる。なお、六韜秘抄は襲用に当り、これを含む二面の下象鼻を各5mm切断している。但し、匡郭の寸法は荘子抄よりも長い。この三者は、摺版の配列が不規則型であること、版心の植字と摺版との組合せが固定していないことなどで二兵衛版とは対立しており、巻数標示の誤植(蒙求抄三53・55)

「五」と誤植など）などからも、二・三巻程度の同時作製を行ったものと思われる。この点は本能寺門前版と共通する側面であるが、異系列間の移動は目まぐるしく、また特定の一面を十数丁に互って連続使用することもあるなど全同ではない。

玄佐の開版には、なお元和九年刊錦繡段鈔と寛永三年刊史記抄とがある。前者は精査の機会を得ていないけれども、△研究▽下九七六図に掲げられた一一の版心に、先に指摘の魚尾の缺損らしきものが認められ、あるいは同一の摺版かと推測される。史記抄の摺版は、左右二対の花弁を配する花魚尾を有するB型四面を使用しており、独自の版式である(但し、新影ではない)。その配列は、首五巻と、尾二巻の各後半が二乃至三面の交互使用を中心とするけれども、中間の巻は特定の一面を連続して使用しており、三巻を同時に作製したものと解され、例えば一二一四はそれぞれ別個の摺版各一面から成っていて例外がないなど、異系列間の摺版移動も稀である。これは、六韜秘抄までの方法を一步進めた工程として理解できよう。但し、玄佐後期開版本独自の方法ではなく、例えば論語抄双辺一八行本も同趣の方法によっている。蒙求抄については、使用活字に史記抄と共通の特徴のあることが指摘されている(△解題▽九四頁)。活字の異同についての言及はこゝでも避けるけれども、版式面での比較から、莊子抄とともに玄佐前期開版本の系列に属することが判った。更に明徳記裏張りでの共存によって、二兵衛版と玄佐版とが、密接な関係にあった可能性がでてきたと言つてよいであろう。

以上の考察で明らかなく、摺版の様式は、書肆によつても一定していないし、本能寺門前版によつて帰納した二類八種の工程にしても、古活字版の総てを尽してはいないのであつて、二兵衛版や玄佐版がそれぞれ別個の方針によつてゐることは、右に見たとおりである。そのいずれの方法が一般的であり、また最も能率的であつたかなど、解明すべき問題もなお残されている。

古活字版の版式は、このように極めて複雑である。しかしながら、摺版を通じての考察は、無刊記版や無刊年版の開版年月を採る上で、やはり有効な手段である。従って、当該版本を国語史料として位置付けるための有用な手続きとしても、考慮されるべきであろう。

古活字版の調査に当り、公私に互って、多くの方々から多大の便宜を与えられた。あまりに多岐に互っており、その一々については銘記しないけれども、篤く御礼申しあげる。

なお、本稿は昭和四八年度科学研費補助金による総合研究A(代表亀井孝)の報告の一部である。

—一九七三・一一・三〇—

同一摺版△B4Vの推移——摺面の比較的明瞭なもの——

孟子抄一 三

孟子抄十四 三十二

周易抄一 六

周易抄六 五十七

毛詩抄五 十六

毛詩抄十七 十七

日本抄上 二十六

日本抄下 於洛陽本能寺前町開板 五十五